



豊田市
郷土資料館
だより
No.48

Toyota City Museum
Of
Local History



新吉原三浦屋の高尾 頼兼君身請けの図
(館蔵・化粧の道具展にて展示紹介)

目次

・企画展 「館蔵・化粧の道具展」	2
・企画展 「猿投山麓の遺跡Ⅲ」	3
・ふるさとの祭事記 — 神楽とちゃらぼこの笛 —	4
・名鉄三河線 猿投—西中金—	5
・日本最初の化学私塾「錦径舎」跡 宇都宮三郎補遺	6
・平成15年度郷土資料館事業報告	7
・文化財シリーズ・資料館ニュース	8



企画展開催のご案内 「館蔵・化粧の道具展」

平成16年7月17日(土)～9月5日(日) 7/19を除く月曜休館
会場：豊田市郷土資料館 入場無料

いつも美しくありたい…。そう願う女性たちはいつの時代も変わりありません。

今回は、郷土資料館収蔵品の中から実際に市域で使われ、大切に保管されてきた化粧道具・装飾品を展示紹介します。

化粧するとは身体に直接施す装飾、身を飾る・装う方法ということができます。しかし、その意味は、時代とともに変化します。古代では魔よけ・護身といった呪術的なものから、次第に身を飾る意味が強くなっていきました。時代によっては髪形や髪飾りが特定の階級のみが使えるものであったり階級により服装が決められていた時代もありました。個人的には美的欲求を満たす行為であり、個性を確立・保持する行為、個性を主張する行為でもあります。

展示資料から 鏡

古代の銅鏡は、権力の象徴であり、邪悪なものを跳ね返す、寄せ付けない、とされて墓に埋葬されるなど歴史的にみると信仰的な意味をもっていますが、今回の展示資料は日常の道具として鏡が使われた時代、特に江戸時代後期から明治期の鏡です。

鏡の背面の文様を一つ一つ見て行くと、吉祥文・鶴亀文・花鳥画文・草木に文字を配置した図様とさまざまです。これら鏡の意匠は、着物や工芸品の図柄と共通し、当時の流行をうかがうことができます。



鏡(左：亀楽字波に亀文 右：鶴亀吉祥文)

大きさは、3寸～6寸(約3.1cm～約18.2cm)で8種類程度の規格があったといわれ、江戸時代後期にはより大型の7寸(約21.2cm) 8寸(約24.2cm)の鏡も作られるようになりました。展示では最も大きい8寸の鏡が4枚ほどあります。

髪飾り ^{かんざし}簪・^{こうがい}笄・櫛



浮世絵に描かれた女性を見てください。髪を結った前髪の後ろに櫛をさし、種類の違う^{かんざし}簪を3本、まげの左右からは花飾りのついた^{こうがい}笄がみえます。後ろのまげには手結^{てがら}という布が巻かれ、前髪も同じ柄の布で結んでいます。簪・笄・櫛どれをとってもオシャレで、華やかです。一つ一つの細工が細かく美しい工芸品としても見ごたえがあります。簪はとくに種類が多く、玉簪・花簪・かわり簪・平打簪等と形で分類されていますが、素材の違うものや大きさの違うものなど、流行や個人の好みによってさまざまなものがあります。

笄は、平安時代には公家の男子の髪を巻きとめたり、冠を固定したりするためのものでした。江戸時代には女性が髪を巻きつけてまげを作るために使われましたが、次第に装飾的な意味で使用されるようになっていき、片端が取り外せるものや両端に装飾が施されたものができてきました。

櫛は、現在も使う道具ですが、江戸時代には多様なまげの流行とともに髪に挿す櫛として、装飾的な櫛が流行しました。

展示では、お歯黒の道具、元結、かもじ、昭和初期に使われた化粧品瓶の他、市内の遺跡から発掘された勾玉や管玉等、古代の装飾品もあわせて展示します。

企画展「猿投山麓の遺跡Ⅲ」がはじまりました

平成16年5月22日(土)～8月31日(火) 7/19を除く月曜日休館
会場：豊田市棒の手会館(猿投町別所23-1) 入場無料

豊田市では現在までにおよそ500の遺跡が確認され、県内では豊橋・名古屋・瀬戸に次ぐ数となっています。中でも、市域北部の猿投地区には200近い遺跡が存在し、市内で最も遺跡が豊富な地域です。

企画展「猿投山麓の遺跡」は、平成11・12年度に続く3回目の展示となりますが、今回は最近の発掘調査資料や個人蔵の資料など、特に初公開の資料を中心に展示しています。主な内容は以下のとおりです。

■ ^{みふね}御船城跡(御船町)出土 ナイフ形石器【初公開】

市内最古級(約18,000年前)の旧石器時代の石器です。

■ ^{まんかだ}万加田・船塚遺跡(荒井町)出土

縄文土器・石器・土偶

縄文時代中期後半(約4,000年前)の集落で、造形色豊かな土器などが多数出土しました。

■ ^{ひらすき}花本遺跡(花本町)出土 木製平鋤

古墳時代中期(約1,600年前)の水路脇から出土しました。土を掘り起こす道具ですが、現在のスコップと変わらない姿であることに驚かされます。

■ ^{かみむかいだこよう}上向イ田古窯(亀首町)出土

^{すえき}須恵器・^{はにわ}埴輪 【初公開】

昭和40年に猿投町誌編集委員会が調査した窯跡で、現在のところ西三河では最古の6世紀前半に位置づけられます。家・盾・甲冑などをかたどった形象埴輪が多数存在することが特徴です。市内で埴輪を立て並べた古墳は多くありませんが、資料を詳細に検討したところ、直線距離で3km以上離れた青木原2号墳にこの窯で焼かれた須恵器・埴輪が供給されていた可能性の高いことがわかりました。両遺跡の資料を並べて展示していますので、じっくり見比べてください。

■ 滝1号墳(御船町)・勘八2号墳(勘八町)・寄元古墳群(加納町)出土 土器・装身具・武器【初公開】

6世紀後半から8世紀前葉にかけて築造された古墳です。

■ ^{うえのだん}上ノ段遺跡(加納町)出土 ^{こもちまがたま}子持勾玉

親勾玉の背や腹に勾玉形の小突起(子勾玉)を付けたものを子持勾玉と呼びます。主に5～7世紀につくられたもので、全国で約450点が確認されています。上ノ段遺跡の子持勾玉は全長11.6cmと大型で、県内最大の大きさを誇っています。



展示会場の様子

■ 舞木廃寺・舞木古窯(舞木町)出土 瓦・^{がとう}瓦塔

7世紀後半に建立された舞木廃寺は、市内唯一の国指定史跡です。平成14年の調査で出土した瓦塔(ミニチュアの焼き物の塔)や、平成12年に発見された、舞木廃寺の瓦を焼いたと思われる窯の資料があります。

長い眠りから覚めた遺跡・遺物を、パネル等を用いてわかりやすく説明しています。先祖たちの智恵や思いを感じながら、私たちの現代につながる過去をたどってみてください。(森 泰通)



上ノ段遺跡出土の子持勾玉



南から上ノ段遺跡と猿投山をのぞむ

－神楽とチャラボコの笛－

むかし、豊田は多くの村に分かれていました。各村には村の神社があり、鎮守の神様として祀られていました。豊田には神明社や八幡社、八柱神社といった神社が多いのですが、八百万^{やおよろず}の神といわれるようにいるいなる神社があります。神様のご利益によって、春祭り、夏祭り、秋祭りなどが行われたほか、また雨乞いなどの祈願なども行われていました。

こうしたお祭りは、年に一度のことであり、お祭りとともに行われる奉納・余興は最大の娯楽でした。これらを神楽^{かぐら}というように、とりわけお祭りを一番楽しみにしていたのは神様だったのでしょうか。お祭りには神楽のほか献馬^{けんば}や山車^{だし}、祭囃子^{まつりばやし}、歌舞伎など様々な祭事や芸能が奉納されました。神様に喜んでもらおうと氏子や若い衆は一生懸命練習しました。

豊田の伝統的な神楽には巫女神楽と獅子神楽であるところの神楽獅子(嫁獅子)があります。現在、神楽獅子を行っているところはなくなりましたが、その痕跡として獅子頭を残す地域はたくさんあります。



巫女神楽(みこ舞)



八草の獅子頭(左が雄、右が雌)

豊田には2種類の巫女神楽があり、ひとつは神事や結婚式で行われる神前神楽^{みこまい}で巫女舞といわれるものです。もうひとつが民俗芸能に分類される里神楽で一般的にみこ舞といわれ、「巫子舞」「御子舞」「神子舞」「舞姫舞」などの文字が充てられる稚児(小学2年～5年くらい)の舞です。このふたつの巫女神楽は外見からは区別がすることがむずかしく、地域でも混同されているのが現状です。みこ舞には巫女的な要素はなく女兒の舞のかわいさをお供えて、神様に楽しんでもらうものだともいわれています。

神楽を始めとして献馬や祭囃子、歌舞伎などお祭りの奉納祭事は若い衆(青年会というところもあります。)

の担当となっていました。お祭りが近づいてくるとピーヒャラピーヒャラドーンドン…、チャラボコチャンチャンスチャンチャン…といった笛や太鼓の音にだんだん力が入り、村中に響き渡るようになります。特にチャラボコ・打ハヤシといわれる祭り囃子は若い衆の面目がかかっており、地域によっては太鼓合戦といわれるような太鼓の打ち比べなどをやるところもありました。そうしたところでは隣村には絶対負けられない意地があり、太鼓の張り具合やより大きな太鼓を買うためにたくさんのお金をかけたようです。

日本の伝統的な笛には、竜笛・能管・横笛・篠笛・神楽笛・囃子笛などがあります。このうちお祭りになどの民俗芸能に使われる祭笛は一般的に篠笛と呼ばれていますが、豊田や西三河、尾張に分布するみこ舞に使われる祭笛は神楽笛、神楽の系統の祭り囃子で使われる祭笛を囃子笛と呼ぶケースが多いようです。

神楽笛の構造は流儀により統一した規格がみられますが、囃子笛については神楽笛を流用したもののから指孔の間隔が不揃いのものまで様々なものが見られ、神楽と祭り囃子の歴史を物語るもの大変興味深いものです。9月18日(土)から開催する「企画展ちゃらぼこ」ではこうした笛の数々も展示しますのでご覧いただきたいと思います。



いろいろな祭笛

神楽笛(市販品)

囃子笛(市販品)

囃子笛(手作り)
藤沢 水神囃子

囃子笛(手作り)
八草 八柱太鼓

企画展ちゃらぼこ

と き 9月18日(土)～12月19日(日)
ところ 豊田市棒の手会館 特別展示室

ちゃらぼこ大会

と き 10月24日(日)
ところ 猿投棒の手ふれあい広場

(蟹 一夫)

名鉄三河線 猿投—西中金

今年の3月末をもって、名鉄三河線の猿投—西中金間が廃線となりました。3月31日には終着駅である西中金駅で「レールバスお別れ会」が開かれています。この路線を利用してきた地域の人や鉄道ファンも集まり、その名残を惜しんでいました。



レールバス

名鉄三河線は大正3年(1914)に、当時の三河鉄道(株)により刈谷—大浜港間14.5kmが営業されたことにより始まります。その後、順次、北部へ延伸され、大正13年には猿投まで開通しました。その年、三河鉄道(株)は足助町までの路線延長方針を樹立し、あわせて、既設路線前全線の電化を決定しています。

今回、廃線となった猿投—西中金間は、この北部方面への延伸計画に沿って、昭和2年8月から昭和3年1月にかけて開通しています。しかし、西中金から足助までの間は足助町追分までの用地買収と路盤造成が行われたものの、その先の用地買収の難航や不況の影響により、工事施工期限の延長を繰り返しました。三河鉄道(株)が名古屋鉄道に合併された後の昭和33年にはその免許を返上し、ついには開通に至りませんでした。

1日あたり乗降客の推移 (人)

年 度	三河御船	枝 下	三河広瀬	西中金
S44年度	743	372	1,056	1,323
S50年度	467	290	681	917
S60年度	299	218	586	819
H14年度	128	89	321	353

現在のようにモータリゼーションの発達していなかった頃、鉄道はバスとともに近年の地域交通の主役でした。昭和40年代頃までは沿線人口の増加の影響や、通勤・通学者の増加により、この区間の利用者も年々増加してきました。しかし、山間区域にあって人口の少ないこの沿線では、昭和40年代前半から鉄道利用者が年々減少することになります。このような事情から、昭和60年には、それまでの電車から経費の安いレールバスへの運行に替えられました。

三河広瀬貨物輸送量

年 度	発 送	到 着
S35年度	22,970t	991t
S50年度	8,663t	165t

また、かつては沿線で産出された粘土などの貨物輸送にも大いに活躍していた路線でした。しかし、貨物輸送も昭和58年に廃止となっています。

この度、名古屋鉄道(株)のご好意により、三河広瀬駅の「駅名看板」「運賃表」「時刻表」「駅ホーム表示板」を寄贈していただきました。長い間、市民の足として利用され、親しまれてきた地域交通の歴史資料として大切に保存していくとともに、展示資料として活用させていただきます。



三河広瀬駅 駅舎

【参考文献】

猿投町誌 / 豊田市史(近代編) / 豊田市統計書(昭和42年、昭和50、昭和60、平成14年版) / 「特別展 乗り物の歴史—近代豊田の交通—」

日本最初の化学私塾「錦径舎」跡

宇都宮三郎補遺

宇都宮三郎(1834～1902)は、幕末から明治にかけて活躍した豊田市ゆかりの化学技術者で、日本の近代化学の父とも言われる人物です。

豊田市郷土資料館では、平成13年度に特別展「^{せいみ}舎密から化学技術へ」を開催し、三郎の生涯と事跡を紹介しました。しかし準備期間等の限りもあり、特別展の中では紹介できず、また明らかにできなかった課題が多く残ってしまいました。特別展終了後、断続的・断片的ながらそれらの課題に関する情報等を得ることがあり、館だより(40・45号)でも報告してきました。今回は、三郎が明治2年(1869)に創設した日本最初の化学専門の私塾「^{きんけいしゃ}錦径舎」の跡地について紹介します。

下の写真は、私用で上京した際に、三郎が出版した「錦径舎学則」(注1)に記載されている地図と、明治期の古絵図、現在の地図を見比べながら、場所を探し当てて撮影したものです。



「錦径舎」跡

この場所の地番は、東京都千代田区神田錦町3丁目6番地です。東京電機大学の西側裏手の向い側にあたり、最寄りの駅はJR御茶ノ水駅です。当時の名残を留めるものはなく、またそれを示すものもないため、ここが日本の化学専門私塾発祥の地であることを知る人はほとんどいないことでしょう。

錦径舎の位置を特定して紹介するのは、今回の館だよりが最初になると思っていたのですが、資料を調べなおしてみると、残念ながら『明治化学の開拓者』(注2)という本の中で既に現在の場所についての記述がなされていました。



「錦径舎学則」(名古屋市東山植物園蔵)

○部分が錦径舎の場所

錦径舎が設けられた場所は、元は新庄右近(旗本?)という人物の屋敷で、明治3年(1870)4月に三郎が明治政府から正式に拝借しています(注3)。しかし、錦径舎学則が刊行されたのは明治2年5月のことなので、おそらく明治2年3月に三郎が明治政府から開成学校への出仕を命じられた時から、開成学校に近いこの場所に移り住んだのでしょう。

安政4年(1857)に尾張藩を脱藩して以来、三郎はその時々に関係した人物の屋敷などに寄宿し、住居を転々としています。例外的に、元治元年(1864)に幕府奥医師・桂川^{ほしゅう}甫周の屋敷の庭に西洋館を建てて自らの住まいとしますが、幕末の混乱の中でそこにも長くは住めませんでした。もしかしたら、この屋敷の持ち主であった新庄氏と三郎とは、何らかの関係があったのかもしれません。

いずれにせよ、三郎はこの錦径舎で初めて腰を落着け、明治2年に大澤^{てい}貞と結婚もしています。この結婚に関して、結婚式当日に媒酌人が嫁を連れて三郎の家に行ったところ、三郎は化学試験室で実験に熱中し新婦の出迎えもしなかった、という逸話(注4)が残されています。実際の錦径舎の活動内容などは不明ですが、化学試験室があり三郎が実験をしていたことは推測できます。

(天野博之)

注1) 錦径舎の学則および教授内容などが記載されている

注2) 塚原徳道 1978 (三省堂)

注3) 幸福寺資料

注4) 読売新聞 明治25年5月11日記事

平成15年度郷土資料館事業報告

1 文化財保護審議会

委員委嘱(15年6月1日～2年間)

審議会開催(年4回)

史跡・展示施設視察研修

(松阪市小津安二郎青春館、宝塚古墳ほか)

豊田・西加茂文化財保護委員研修会

(西尾市岩瀬文庫、吉良町金蓮寺ほか)

文化財防火デー

(如意寺、高月院、六鹿邸)

2 文化財指定

鈴木正三遺跡(江戸、山中町恩真寺)

木造阿弥陀如来立像(鎌倉、加茂川町法興寺蔵)

琴平町のシデコブシ自生地(市→県指定)

3 展示

郷土資料館総入館者数 11,250人

特別展「白瀬中尉の南極探検」

10月25日～12月7日 1,936人

併催事業・体験マイナス25℃ 11月1日

・白瀬中尉ポイントラリー 332名

特別公開「法興寺阿弥陀如来立像・胎内納入品」

6月7日～同月22日 592人

企画展「古代のきらめき」展

7月19日～8月31日 2,094人

企画展「又日庵展」

1月31日～3月14日 1,441人

棒の手会館「あおりに描かれたオマントの美」

4月26日～7月6日

棒の手会館「劇場若林座」

1月6日～4月18日

松平郷館・常設展「松平の歴史」

4 施設整備等

文化財施設耐震補強工事

(民家、喜楽亭、又日亭、七州城隅櫓)

岩倉神社舞台トイレ新築

六鹿会館展示場開設

(仮)産業・くらし資料館改修設計

文化財施設耐震補強設計

(土蔵、丸根城跡東屋)

5 補助事業

伝統的郷土芸能保存修理、維持事業補助

(チャラボコ、神楽)

有・無形民俗文化財保存修理、維持事業補助

(山車修理、山車・囃子・棒の手保存維持、郷土の先人顕彰)

猿投神社文化財収蔵庫修理



伝統的郷土芸能・神楽(古瀬間町)

6 資料調査

豊田市史検証・補完、同人物編精査

史料叢書編集・刊行(鈴村家文書・下巻)

昭和史資料調査

とよたの祭事記調査映像記録(石野の万灯祭)

7 埋蔵文化財

曽根遺跡公園整備事前発掘調査(5～6月)

緊急発掘・範囲確認調査(国庫補助市内遺跡)

(曽根・神明・堂外戸・丸根・伊保遺跡)

出土品整理

(敷田・切山・兼近・吉兼・七曲古窯、伊保東古城)

手呂の銅鐙(県指定)保存修理

古城遺跡発掘調査報告書刊行

8 史跡整備

曽根遺跡公園整備工事

鈴木正三遺跡(市指定)第1期整備工事

百々貯木場跡(H13～15年度)測量調査

だるま窯測量調査

池田第1号古墳(県指定)用地取得

その他

松平八代歴史サミット(4月)博物館実習受入れ

夏・春休み歴史体験講座開催

・夏休みこども月間(まがたま作り、土偶作り、ポイントラリー、金属鑄造実演)

・春休みこども週間

きょうどしりょうかんであそぼう!

総合学習支援、棒の手会館収蔵庫くん蒸

おうけつ
甌穴とは、非常に長期にわたる川の水の浸食作用によってつくられたかめ状の穴です。

河床の割れ目やくぼみがあると、川の水が渦を巻き、くぼみを大きくしていきます。そのくぼみの中に砂や小石が入ると、渦によって回転しくぼみをいつそう大きく深く掘り下げます。

このようにして甌穴はできていきます。

甌穴ができるためには、河床に岩盤が露出していることや、川の流れが急なことが条件です。現在甌穴がみられる場所は、長い間このような条件を維持してきたところといえます。



文化財シリーズ

48

おうけつ
巴川の甌穴
(市指定文化財)

豊田市王滝町周辺の巴川河床には、約200mにわたって大小150個あまりの甌穴が発達しています。陽にさらされているもの、水を貯めているもの、らせん状のもの、流水に洗われているものなど、実に様々な形の甌穴を見ることができます。中には直径1mを超すものもあり、

穴の形が崩れかけたものも多くあります。巴川の甌穴は、昭和53年3月28日に市指定文化財に指定されました。

市内では王滝溪谷(歌石園地下流100m・仁王川河床)や平戸橋周辺(通称弁天岩付近)でも甌穴を観察することができます。

資料館NEWS

こどもの日によろいをきてみよう！終了

5月5日のこどもの日に「こどもの日によろいをきてみよう！」を開催しました。これは、鎌倉時代と戦国時代の鎧(レプリカ)の試着ができるというもので、今年度で2回目になります。今年は鎧の他にも姫の衣装の試着もできました。

試着の他にも自分だけのオリジナル貝あわせ作り、郷土資料館オリジナルよろい作りキットを使ってのよろい作りなども楽しむことができました。



試着の様子

鎌倉時代の鎧と姫の衣装に大変人気が集まってしまったため、一時期2時間以上待ちがでてしまいましたが、試着と挙母城の模型をバックにしたの撮影撮影をご家族で楽しんでいただけたようです。

試着希望者は鎧と姫あわせて473人、当日の入館者は882人と大変な盛況ぶりでした。



豊田史料叢書『鈴村家文書 下』発行 2,700円
『鈴村家文書 中』に続く挙母城下の町屋史料です。祭礼や車狂言についての記録や、天保7年に起きた「加茂一揆」についての記述のある日記などから、当時の出来事をうかがうことができます。

郵送販売も行っておりますのでご希望の方は郷土資料館までお問合せください。

利用案内

開館時間 9:00~17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館) 年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.48■

平成16年6月25日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>